

氏 名（本 籍）	リトル 奈々重（岐阜県）
学 位 の 種 類	博士(看護学)
学 位 記 番 号	甲第24号
学位授与年月日	令和6年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項・甲南女子大学学位規程第5条第1項
論 文 題 目	慢性疾患を持つハワイ在住日系移民高齢者のヘルスリテラシーと文化的影響に関する研究
論文審査委員	(主査)甲南女子大学 教授 前川 幸子 (副査)甲南女子大学 教授 中村 安秀 (副査)甲南女子大学 教授 合田 加代子

## 〔論文内容の要旨〕

### 〔目的〕

本研究は、慢性疾患を持つハワイ在住日系移民高齢者のヘルスリテラシーの現状と課題を明確にし、ヘルスリテラシーの促進と具体的な看護実践の方策を提示するために、文化的障壁を主軸としたヘルスリテラシーへの文化的影響について明らかにすることである。

### 〔研究方法〕

研究デザインは、収斂デザインによる混合研究（量的研究および質的研究の混合）である。本研究は、慢性疾患を持つハワイ在住日系移民のヘルスリテラシーへの文化的影響について包括的に理解するために、量的データと質的データにより文化的影響に関する内容について、より深みのある結果が導き出されることを意図して混合研究を行った。

対象者は、ハワイ州ホノルル市にある民間クリニックのメディケア登録者（65 歳以上）全 330 名中、日系移民高齢者 231 名であり、そのうち賛同を得た 149 名とした。量的研究はヘルスリテラシー評価尺度として The 14 item health literacy scale for Japanese adults (HLS-14) の日本語版 (Suka M, et al 2013) を使用し、ヘルスリテラシースコア（機能的得点、伝達的得点、批判的得点、総得点）と基本的事項、移住関連事項、文化的関連事項等との相互の関連性について分析を行った。データの統計解析には、IBM SPSS Statistics ver.28 software を使用した。質的研究は量的研究対象者 149 名中、インタビューの同意を得た 9 名にインタビューガイドに基づく半構成的面接を実施し、面接内容の逐語録をデータとして質的記述的に分析した。なお、甲南女子大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 2020059）。

分析方法は、量的研究では、基本的事項、移住関連事項、慢性疾患臨床データ、健康意識関連事項とヘルスリテラシースコアとの間で相互の関連性を Cross-section の量的評価により分析した。分析は各項目を独立変数、ヘルスリテラシースコア（総得点、機能的得点、伝達的得点、批判的得点）を従属変数として行った。調査対象者の統計学的特性及びその他の

特性について単変量分析及び多変量分析による定量分析を行った。

質的研究では、質的記述的分析を行った。逐語録を精読し、ヘルスリテラシーに影響を及ぼす文化的側面について、一つの意味内容を示す部分を抽出し、意味が明確になるような簡潔な一文で表現しコードとした。さらに、コードの文脈を考慮し、類似性、相違性を見極めながら共通する内容でサブカテゴリを抽出し、さらに、カテゴリを抽出した。

#### [結果]

量的研究：ハワイに在住する日系移民高齢者のヘルスリテラシー（高スコア）への文化的影響は、「言語（英語）能力の高さ」「年齢の低さ」「健康への関心の高さ」が有意に関連していることが示された。また、機能的得点（高スコア）とは「英会話力の高さ」、伝達的得点（高スコア）とは「男性」、「英会話力の高さ」、批判的得点（高スコア）とは「年齢の低さ」、「英会話力の高さ」、「健康への関心の高さ」、「医師との相談のしやすさ」が関連していた。

質的研究：99 のコードから 28 のサブカテゴリー、12 のカテゴリーが抽出された。日系移民高齢者にとってハワイの環境は【母国の生活習慣への維持と回帰】がしやすく住みやすい場所である反面、日本と米国の保健医療制度の違いから【医療システムの不安によるセルフケアへの動機づけ】につながっていた。また、加齢に伴う退行が家族に迷惑をかけたくないという思いとなり、【家族への気遣いがもたらす自立への意欲】を喚起していた。しかしながら、自立する上では、【英語力の低下を自覚しての情報収集】が必要となることから『家族を頼って健康情報を集める』など、【信頼できる情報にアクセスする努力】という行動がみられた。また、行動につながる思考の特徴として、【病気を深く気にしない捉え方】や、【医師に委ねる病気との付き合い方】という、専門家に任して安心を得る傾向がみられた。とくに日系移民高齢者にとってプライマリケア医は重要な存在であり、【互いに分かり合える日系クリニックの選択】によって、病気と向き合おうとするが、『医師への遠慮から聞くに聞けないもどかしさ』を感じたり、【医師への不満と折り合いをつける付き合い方】をしながら、医師との関係に一定の距離を保ちながら付き合っていた。また、ハワイで生まれ育った子どもと親世代の間には理解しえない溝があり、【子どもとの言語の壁や価値観のズレを感じながらの付き合い】を選択し、子どもたちとの間にも一定の距離を保ちながらの関係性を作り上げていた。このように、日系移民高齢者は英語力の低さという困難感を抱きつつ、日本人コミュニティという限られた環境の中で身近な人々や専門職との関係性を維持・調整しながら【自分で出来る情報の選択と健康行動】に取り組み、【病気とうまく付き合いながら自立した暮らしの継続】に向けて努力していた。

量的研究と質的研究の統合（混合研究）により、「言語能力」「年齢」「健康への関心」がそれぞれに関連し合いながら、ヘルスリテラシーの文化的要因として影響を及ぼしていることがわかった。以上の結果から、慢性疾患を有しながらハワイで暮らす日系移民高齢者のヘルスリテラシーの向上を支援するためには、彼らの文化的背景と文化の側面がもたらす健康意識や健康行動の特性を十分に理解した関わりの重要性が明らかになった。

### [考察]

本研究は、慢性疾患を持つハワイ在住日系移民高齢者のヘルスリテラシーへの文化的影響について明らかにすることを目的としている。そこで、ここでは混合研究法のアプローチによる総合的な視点から考察する。日系移民高齢者のヘルスリテラシースコア間には、「言語能力」「年齢」「健康への関心」がそれぞれに関連し合いながら、文化的要因として影響を及ぼしていることがわかった。つまり、移民を背景とする高齢者にとっては、加齢そのものが身体的、認知的、機能的に大きな変化を及ぼし、これまで話せていた英語も聴力の衰えや英語を使うこと自体に煩わしさを感じるようになり、それが英語能力の衰退化及びコミュニケーション不足や人との繋がりへの減少を招き、より情報へのアクセスが困難な状況を生じさせている。さらに、日本人特有の遠慮や気遣いといった文化的態度は、患者と医療者間での距離を置いたコミュニケーションとなり、十分な対話による相互関係を築きにくい可能性が考えられる。患者の言葉を通じた習慣、文脈性や意味合いを理解することや文化的態度を理解することは、患者と医療関係者のコミュニケーションの改善と安定した相互関係の構築や質の高い医療の提供及び意思決定に貢献できると考える。また、高齢者の健康への関心は、ヘルスリテラシーのみならず年齢や高齢者を取り巻く環境、個人の価値観や主観的評価は、文化的影響を受けながら医療への意思決定や健康の行動特性として現れることが認められた。このように、ハワイ在住の日系移民高齢者は自立への意欲を持ちながらも、英語力の低さや健康情報を理解することの困難さから、他律性に向かわざるを得ない状況の中で、受動的態度と距離感を保ちながら周囲との協調性を重視した関係づくりによって自分たちのセルフケア行動につなげていると思われる。したがって、日系移民高齢者のヘルスリテラシーの向上を支援するためには、言語対応のみならず、彼らに根付いている文化的信念・習慣・態度・価値観・遠慮や気遣いなどの行動特性・コミュニケーションスタイルなどを十分理解し、尊重した関わりの重要性が示唆される。

### [結論]

量的研究と質的研究の結果の統合から、ハワイに在住する日系移民高齢者のヘルスリテラシーには、情報へのアクセスと評価、情報の理解、意思決定のプロセスにおける「言語能力」「年齢」「健康への関心」を中心に、文化的要因が影響を及ぼしていることが明らかになった。すなわち、移民を背景とする人々のヘルスリテラシーは、彼らが移住国で健康に関する情報を正しく理解し、適切な健康習慣を身につける能力を意味し、年齢、言語能力及び健康への関心と文化的影響が移民のヘルスリテラシーを向上させる上で重要な要素となることが示唆された。

したがって、慢性疾患を持ちハワイで暮らす日系移民高齢者のヘルスリテラシーの向上を支援するためには、彼らの文化的背景と文化がもたらす健康意識や健康行動の特性を十分に理解した関わりが重要と言える。

## 〔論文審査の要旨〕

論文審査は2024年2月1日15時より約1時間30分にわたり、主査および副査2名で構成する論文審査委員会により行われた。申請者はパワーポイントを使用して論文を発表した後、主査・副査と質疑応答を行った。

本研究は、慢性疾患を持つハワイ在住日系移民高齢者のヘルスリテラシーの現状と課題を明確にすることで、文化的影響を踏まえたヘルスリテラシーの促進及び看護実践の方策を提示することにある。ハワイにおける日系移民高齢者が、慢性疾患と共に、その人らしく生活していくために必要なヘルスリテラシーを獲得するために、言語や慣習といった多面的要素を持つ文化的要因を踏まえた看護の必要性を構造化し、具体的な看護を見出すという学術上・看護の専門性向上の意義、及び新規性が認められた。

研究目的に沿った研究デザイン（混合研究、収斂デザイン）であり、定量的（質問紙）・定性的（半構造化面接）研究方法は妥当であった。また、混合型研究に基づき得られたデータを、文化的影響を主軸に分析することで、ヘルスリテラシーを促進するための要因とその方法を導き出し、研究目的に添う結果、結論を得ることができた。中でも文化的影響を多面的に考察することで論文を洗練させるなど、中間発表の課題を生かし更に発展的に取り組めた論文構成であった。

審査におけるプレゼンテーションは、熟考された論文内容を、丁寧かつ簡潔に分かりやすく発表することができた。

研究成果の波及効果・発展性では、本研究における先行研究は見当たらず、グローバルな見地における看護が要請される現代において、本論文は先駆的なテーマであり、研究的価値は高いと判断できる。

以上から、グローバルな看護が希求される中で、日系移民、高齢者、慢性疾患、ヘルスリテラシーという多様性を鍵概念とし文化的影響を主軸にした本研究は、具体的且つ示唆に富んだ研究である。また、継続的に論文の精度を高めようと課題を克服する真摯な姿勢も併せて、博士後期課程の修了者として十分に評価ができた。

## 〔最終試験の結果並びに学位授与に関する意見〕

論文審査に引き続き、最終試験として論文に関連する事項について、以下の4点を中心に口述試問を行った。

1. 博士論文作成に有用であった論文の概要及び活用について説明を求めた。

本論文の引用文献の中から、Saldo, M. 他(1988)の“Cultural barriers in oncology: Issues in obtaining medical informed consent from Japanese American elders in Hawaii ” および、Prochaska, J. 他(1997)の“The transtheoretical model of health behavior change” の2つの論文について説明し、ヘルスリテラシーと文化との関連性を研究する上で基盤となったことを述べることができた。

2. 研究過程においての学び及び重要と認識した点について説明を求めた。

日系移民に関する先行研究が少ない中、エビデンスに基づいた活動の重要性が再認識でき、また混合研究法を採用した本論文の作成においては、研究の土台となる緻密な研究計画立案が特に重要であることについて論拠をもって述べることができた。

3. 研究結果の公表及び今後の発展性についての構想を質問した。

本論文は、移民研究関連の国際ジャーナル等への投稿及び研究協力施設関係者や研究参加者に対する結果説明を実施する考えであることを述べた。また、共同研究によって日系高齢者が抱える現状や課題をさらに掘り下げ、国際看護活動を進めていくという方向性を述べた。

4. 博士後期課程修了後のキャリア構想について質問した。

ハワイをフィールドにした研究活動を進めながら、将来的には日本の医療機関あるいは教育機関に籍を置き、研究を継続していくという考えを述べた。

以上より、論文審査および口頭試問の結果、看護学研究科のディプロマポリシーと照合し、主査・副査・指導教員全員の一致で博士(看護学)の学位を授与するに値すると判断した。